



## 水沼の赤めだら牛のはなし

むかしむかし、むくろぎ山と太郎坊山の谷間は広い  
広い千畳敷もある沼だったそうだ。沼の岸は古い谷地  
で草や木が生い茂り、谷の合間の辺はいつも「ふった、  
ふった」(古田)と波が立っている深みであったという。

その沼に「赤めだら牛」という沼の主が住み、この  
地を安住の地としていた。やがて天地の異変で、その  
沼もぶんぬけ(桧木田)赤めだら牛は、沼の水と共に  
ひよいと(兵衛田)とんだり、はねたり(羽石)して、  
のんのが(布川)のんのがと流され、つきあたって(月  
館)ところは広瀬川、やがて着いたところが「越河の  
馬沼」そして馬と共に住むようになった。

それから今の馬牛の沼となったそうだ。それでも、  
赤めだら牛はむかしの水沼恋しさのあまり、夜な夜な、  
うしみつ時になると「水沼恋し、もおう、もおう」と泣  
いたという。そして、もとの千畳敷の水沼にしたもの